『すべてを治める主イエスの姿』ヨハネ18:1-11

18:1 イエスはこれらのことを語り終えて、弟子たちと一緒にケデロンの谷の向こう
へ行かれた。そこには園があって、イエスは弟子たちと一緒にその中にはいられた。
18:2 イエスを裏切ったユダは、その所をよく知っていた。イエスと弟子たちとがた
びたびそこで集まったことがあるからである。
18:3 さてユダは、一隊の兵卒と祭司長やパリサイ人たちの送った下役どもを引き連
れ、たいまつやあかりや武器を持って、そこへやってきた。
18:4 しかしイエスは、自分の身に起ろうとすることをことごとく承知しておられ、
進み出て彼らに言われた、「だれを捜しているのか」。
18:5 彼らは「ナザレのイエスを」と答えた。イエスは彼らに言われた、「わたしが、
それである」。イエスを裏切ったユダも、彼らと一緒に立っていた。
18:6 イエスが彼らに「わたしが、それである」と言われたとき、彼らはうしろに引
きさがって地に倒れた。
18:7 そこでまた彼らに、「だれを捜しているのか」とお尋ねになると、彼らは「ナ
ザレのイエスを」と言った。
18:8 イエスは答えられた、「わたしがそれであると、言ったではないか。わたしを
捜しているのなら、この人たちを去らせてもらいたい」。
18:9 それは、「あなたが与えて下さった人たちの中のひとりも、わたしは失わなか
った」とイエスの言われた言葉が、成就するためである。
18:10 シモン・ペテロは剣を持っていたが、それを抜いて、大祭司の僕に切りかかり、
その右の耳を切り落した。その僕の名はマルコスであった。
18:11 すると、イエスはペテロに言われた、「剣をさやに納めなさい。父がわたしに
下さった杯は、飲むべきではないか」。

●主題
Ⅰ．すべてを知るイエスの姿（4節）
Ⅱ．主権を持つイエスの姿（4-9節）
Ⅲ．御心に従うイエスの姿（10-11節）
●序論
　１７章でのとりなしの祈りは、イエスさまが捕らえられようとする場面が展開します。
　これまでのイエスさまの言葉は、すべてこれからの出来事につながっていきます。

　今日「すべてを治める」という言葉を表題に用いました。
　この治めるという言葉には、「乱れた状態をしずめて平和で安定した状態にする」と
　いう意味があります。ヨハネはイエスさまが、その異様な状況の中でも、主人公とし
　て、主権を握るお方として、凛として歩まれる姿を描いているのです。
　それこそがあのヨハネが、その目で見たイエスさまの姿であったのでしょう。

　ここにあるのは、御自身が定められた栄光を受けるための歩みです。
　　17:4-5 わたしは、わたしにさせるためにお授けになったわざをなし遂げて、

地上であなたの栄光をあらわしました。父よ、世が造られる前に、わたしがみそばで持っていた栄光で、今み前にわたしを輝かせて下さい。

それはまさにこれから受けようとしている、恥と十字架の苦しみです。わたしたちの救いと永遠の命のために、十字架の苦しみを味わいつくされた、それがイエスさまの、イエスさまにしか成しえない、贖いの業だったからです。
そうしてこの状況のすべてを治める、イエスさまの姿を見ることができれば幸いです。

●本論
Ⅰ．すべてを知るイエスの姿（4節）
18:4 しかしイエスは、自分の身に起ろうとすることをことごとく承知しておられ、進み出て彼らに言われた、「だれを捜しているのか」。

ヨハネはこのイエスさまは、「ことごとく承知しておられた」と表しています。
一方で、もう一つ記されている事実にも注目できます。
18:3 さてユダは、一隊の兵卒と祭司長やパリサイ人たちの送った下役どもを引き連れ、たいまつやあかりや武器を持って、そこへやってきた。

その場を、力で治めようとした人々の意図がそこにありました。

そのすべてを、イエスさまは知っておられました。
それにもかかわらず、イエスさまは逃げることも隠れることもせず、むしろ自ら「進み出て行かれた」とあるのです。
その毅然とした姿で、そこにある状況を”治めた”。それがイエスさまの姿です。
この先の受難をご自身の栄光として受け取っておられたからです。

私たちの場合、自分の人生でコントロールできないことがらに直面することがあります。
トラブルや混乱が起こったとき、イエスさまのように、すべて知っていた…などとは言えない。
しかし、そこでわたしたちは、「主がすべてもご存じである」と告白できます。
その主が、どんな状況や場所でも、共にいてくださ治めてくださいます。

パウロは、獄中書簡と呼ばれるピリピの手紙で、こう記しています。
何事も思い煩ってはならない。ただ、事ごとに、感謝をもって祈と願いとをささげ、あなたがたの求めるところを神に申し上げるがよい。 そうすれば、人知ではとうてい測り知ることのできない神の平安が、あなたがたの心と思いとを、キリスト・イエスにあって守るであろう。（ピリピ4:6-7）

「主はすべてをご存じです」。　わたしたちの思いを不安を、そして状況のすべてを

治めてくださるのは、イエスさまなのです。

Ⅱ．主権を持つイエスの姿（4-9節）

18:6 イエスが彼らに「わたしが、それである」と言われたとき、彼らはうしろに引きさがって地に倒れた。

本来そこで、主導権を握るべきは、捕まえに来た方のはずが、すっかり逆転しています。おそらくそこにいないと、わかりづらいかもしれません。それほどの権威あるイエスさまのお姿と、霊的な言葉の力が表現されています。

「それは私だ」という言葉は、原文では「エゴー・エイミ」です。
イエスさまはここで、神の子としての権威をもって、ご自身をあらわされました。

その上で、さらにイエスさまは言われました。

18:7-8 そこでまた彼らに、「だれを捜しているのか」とお尋ねになると、彼らは「ナザレのイエスを」と言った。イエスは答えられた、「わたしがそれであると、言ったではないか。わたしを捜しているのなら、この人たちを去らせてもらいたい」。

ここでイエスさまは、その人たちの目的は、ご自分にあることをその問いかけによって示すことで、ご自分の弟子たちを、その危険な状況から逃せようとされました。
イエスさまは、そこにある危険から弟子たちをを守られたのです。
イエスさまの祈りを思い起こし、またその成就を見るのです。

17:11 わたしはもうこの世にはいなくなりますが、彼らはこの世に残っており、わたしはみもとに参ります。聖なる父よ、わたしに賜わった御名によって彼らを守って下さい。

この世にあるわたしたちの歩みも、あの祈りによって守られています。

Ⅲ．御心に従うイエスの姿（10-11節）

18:10 シモン・ペテロは剣を持っていたが、それを抜いて、大祭司の僕に切りかかり、その右の耳を切り落した。その僕の名はマルコスであった。
18:11 すると、イエスはペテロに言われた、「剣をさやに納めなさい。父がわたしに下さった杯は、飲むべきではないか」。

ペテロは何とかイエスさまを守ろうとしたのでしょうか、剣を振り上げました。
しかしイエスさまは、彼をたしなめて「剣をさやに納めなさい」と命じるのです。
そして、続けて「父がわたしに下さった杯は、飲むべきではないか」といわれます。

ここで、ただ父なる神さまの御心がこのすべてを進めていると、言われるのです。
「杯」とは、旧約聖書で神の裁きであり、それが御心を表す象徴的な言葉です。

自分の思いではなく、父の御心を選び取る。それがイエスさまが大切にされた道です。それが、私たちの救いのための道だからです。

もしかしたら、ペテロの行動は、また私たちの姿かもしれません。
私たちもまた、人生の中で、正しさを求めて、自分の力で何とかしようと、知恵を尽くし、またいたたまれず行動を起こすこともあるでしょう。
ペテロのように、正義感で剣を振るいたくなることもあります。
しかし、主は「剣を納めなさい」と私たちに語りかける言葉を聞くのです。

このまま行動を起こさないなら、何もかも悪い方向に行ってしまう。そんなこと受け入れられない、そういう状況をわたしたちも経験するでしょう。
何もしないのではありません。イエスさまの言葉は、そこで、神の御心に聞き、またその御心に従うように、と求められるのです。
それが、イエスさまに従う者が経験する「違い」となるのです。

もしその「違い」は　あの十字架にあらわされています。そこで私たちの罪からの赦し、救いは完成されていくのです。

●おわりに
あの十字架こそが、圧倒的な「違い」です。
乱れ切り、荒れ切ったこの世の状況の中で、抗うことなく十字架につけられた姿は、人々の目にとても救い主の姿には見えなかったことでしょう。
けれども、この方の、すべての裁きと呪いの盃をその実に味わい尽くす姿こそ、聖書が
わたしたちに伝える救い主のありさまなのです。
ローマ5:6-8
5:6 わたしたちがまだ弱かったころ、キリストは、時いたって、不信心な者たちのために死んで下さったのである。
5:8 しかし、まだ罪人であった時、わたしたちのためにキリストが死んで下さったことによって、神はわたしたちに対する愛を示されたのである。

イエスさまの十字架に「違い」があります。神の愛に生きることで、わたしたちはその「違い」を経験します。　その違いこそ、すべてを治めるイエスさまの姿そのものなのです。
そしてわたしたちもその「違い」に招かれているのです。